
俺達のスピードで

清音純

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺達のスピードで

【Nコード】

N8179B

【作者名】

清音純

【あらすじ】

若くして巨万の富を手に入れた主人公、浅見健吾は田舎の町『青葉町』で隠居生活を送る事を決意する。田舎に住む人々や、町の診療所に入院している難病を抱えた少女、青井若葉と出会い、何気ない日常を過ごしていくうちに、彼は自分の人生の意味とは何かについて考え始めるのだった。

第一話 青葉町（前書き）

内容は中学生～高校生向けです。
子供っぽい部分もありますがご了承ください。

第一話 青葉町

1

人生は、退屈だ。

どうしてこんなに退屈なんだろう。

自分が生きている事に、一体どういう意味があるのか。そんな事を考え出すとキリがない。

揺れるバスの中で、青年は少し大きめの荷物を抱えたまま深いため息をついた。電車とバスを乗り継いで八時間。ようやく、目的地に到着する。終点を告げる車内のアナウンスに、青年は席を立って出口に向かった。

残されていた最後の客を下ろし、バスが去っていく。その最後の客であった青年は、重そうな荷物を肩にかけると、ゆっくりと歩き出した。

青年が目指しているのは青葉町という小さな田舎町だ。別にそこが自分の故郷だとか、そこに知り合いが住んでいるというわけではない。青年はその町の写真すら見たことはなかった。それでも、この青年はその町を引越し先に決めたのである。

青年が少し歩くと、『ようこそ青葉町へ』と書かれた小さな看板が目に入った。文字の塗装の一部は剥げ落ちていて、ところどころ錆びついている。

「聞いた通りだな：」

青年はぼつりとそんな事を呟くと、町の中に足を踏み入れた。

時刻はまもなく夜の七時になるうとしているが、夏真っ盛りのこの時期はまだまだ明るい。にも関わらず、青年が目にした店のほとんどは既に閉店している。田舎は店じまいが早いと聞いていたが、どうやら本当の事だったようだ。

閑散とした夕暮れの大通りに、青年の小さな足音だけが響く。本

当に人が住んでいるのか、正直疑わしい。

「こんばんは」

青年がそんな事を考えていると、突然自転車に乗った見知らぬ中年の男性が声をかけてきた。

「……俺ですか？」

「そうだよ。あんた以外に誰がいるってんだ」

青年は辺りを見回したが、確かに周囲に人影は見当たらない。

「……こんばんは」

「改めてこんばんは。見ない顔だが、旅行かなんかかい？」

男性がそう尋ねる。何故見知らぬ人にそんな事を答えなければならぬのか、青年は疑問に思いながらも答えた。

「いえ、ここに越してきたんです」

「ここに？ 珍しい事もあるもんだね。こんな何もない田舎町に」

「すいません。急いでるんでもういいですか？」

見知らぬ人と話す事に居心地の悪さを感じた青年は、早めに会話を切り上げるためにそう言った。

「ああ。そいつはすまなかったね。俺は四丁目で本屋をやってるんだ。よかったら買いに来てくれよな。取り寄せなんかもやってるから」

「ええ。機会があれば」

都会では今時取り寄せをやっていない本屋などほとんどないが、田舎ではやっていないところもあるのかも知れない。青年は適当に相槌を打ってその場を離れた。

手に持った地図を頼りに、新しい自宅に向かう。こんな小さな町では、探すのにも苦労はしないだろう。

「あら、こんばんは」

すると、今度は見知らぬ老婆が声をかけてきた。

「……こんばんは」

何故見知らぬ人に挨拶をするのか。青年は不気味に思いながらも挨拶を返した。

「見ない顔ね。どこからいらしたの？」

老婆が上品な言葉遣いでそう尋ねる。青年は怪訝な顔で答えた。

「この町の人は住人の顔を全員記憶してるんですか？」

「そういうわけではないのだけれど……。この町は人が少ないから、ほとんどの人の顔は覚えてしまうの。特に、若い人は少ないから。それで、どこからいらしたのかしら？」

「……東京ですけど……」

答える義理はないのだが、別に隠しておく事でもないので、青年は素直に答えた。

「まあ、随分遠いところから。大変だったでしょう？」

「ええ……まあ……」

温厚そうな老婆が大げさに驚いているのに対し、青年はさもつまらなそうに言った。

「こんな田舎に何のご用で？ 旅行か何か？」

「……いえ、引越してきたんです」

なおも質問を続ける老婆に苛立ちながらも、青年は一つ一つの質問に答えていく。

「随分お若いのにこんなところに越してくるなんて。おいくつでいらっしゃるの？」

「25です」

「お仕事は？」

「こっちで探そうと思ひまして」

実は青年は初めから仕事など探す気はなかったが、これ以上話しが長くなるのを恐れてそう言った。

だが、青年の嘘は逆効果だったらしい。その答えに老婆は眉をひそめた。

「ここで？ 残念だけど、ここには仕事らしい仕事なんてほとんどないわ。何せこんな田舎だもの。働ける場所も限られているし……」

「そうなんですか。いや、いいです。自分でなんとかしますから」

余計に話が長くなりそうだったので、青年は慌ててその話題を打

ち切った。

「そういうわけにもねえ。ここであつたのも何かの縁だもの。こんな若くてかっこいい男の子の苦境を見て見ぬ振りは出来ないわ。私が後五十年若ければ放っておかなかつたのにねえ……」

老婆は目を細めて愉快そうに笑う。青年は苛立ちを抑えつつなんとか愛想笑いを浮かべた。

実際、青年の容姿は平均以上だった。少し目尻が釣りあがっており、きつめな印象を与えるものの、顔立ちは整っている。

「そういえばお名前を聞いていなかったわね」

「浅見健吾といいます」

浅見と名乗った青年はそう言って腕時計を見た。

「すいません、ここの不動産屋の人と待ち合わせているので、そろそろいいですか？」

「あら、そうなの。それは引きとめてしまつて悪かつたわねえ」

老婆が残念そうに言う。本当に申し訳ないと思つていいのかは、浅見には判断出来なかった。

「それじゃ、俺はこれで」

浅見が早足に老婆の横を通りすぎる。

「あ、待つて」

すると、老婆が何かを思い出したかのように浅見を呼び止めた。

「まだ何か？」

「そういえば、この町の病院で事務員を一人募集してたわね」

「病院の事務員？」

「ええ。この間退職されたとかで、欠員が出ていたの。まだ空いていればいいのだけれど……」

「そうですか。ご親切にどうも。気が向いたら行ってみます」

「そうしなさい。それじゃ、また縁があつたらどこかでお会いしましょう」

そう言うと、老婆は人懐っこい笑みを浮かべて去っていった。

「……これが田舎ってものなのか……？」

浅見は一つため息をつく、重い荷物を肩に担いで、再び歩き始めた。

2

老婆との会話に時間を費やしたおかげで、既に周囲は暗くなり始めていた。もちろん、こんな時間に不動産屋と待ち合わせなどしてない。浅見は東京の不動産屋から渡された地図を頼りに、なんとか新しい自宅を見つけ出した。

町の中心部から少し離れた住宅街にある建物の一つが、彼の新しい自宅だ。一軒家とはいえ、あまり大きくはない。東京に住んでいた頃の3LDKのマンションの方が遥かに広かっただろう。

だが、浅見がこの家を選んだのはその狭さにあった。一人暮らしをするのに、大きい家など邪魔なだけだし、掃除も面倒だ。このくらいのが大きさが丁度いい。

浅見は荷物の中から鍵を取り出すと、ドアノブに差し込みくると右に回す。かちり、という小さな音を確認して、ゆっくりと扉を開いた。

この家はもう大分使われていないらしいが、入居者が来ると事前に聞いていたのか、中はきちんと掃除されていた。

木造家屋独特の匂いが浅見の鼻をつく。都会で生まれ、都会で育った彼にとっては少し新鮮だった。玄関で靴を脱いで、廊下を歩いて行く。歩くたびにぎしぎしと音が鳴った。

(……大丈夫か？ この家……?)

耐震性能は最低であろう事を予想しながら、浅見は奥のふすまを開いた。

「おお……」

4畳半の畳部屋。ここが、今日から彼の暮らす部屋になる。今までフローリングの床でしか暮らした事なかった彼には畳の床は初体験だった。恐る恐る一步足を踏み入れる。フローリングとは違う少し柔らかな質感がした。

「へえ……値段の割にはなかなかいいじゃないか……」

こんな田舎に住みたいなどと思う者はいないのか、この家と土地はほとんど二束三文だった。当初はローンを考えていたのだが、あまりの安さに現金で一括購入してしまったほどだ。生活は不便かもしれないが、騒音や汚染だらけの都会よりこちらの方が自分にはあっているかもしれない。

そんな事を考えながら、浅見は畳の上に大の字に横たわった。今日はベッドはおろか布団すら用意していない。こちらで購入する予定だったのだが、先程見た限りもう店は閉まっているだろう。

浅見は鞆の中から毛布を一枚取り出した。万が一のために持つてきておいてよかったと考えながら、毛布をかぶる。長旅の疲れか、その日はあつという間に深い眠りに落ちていった。

第二話 三岳先生

3

翌日、浅見は昼過ぎになって家を出た。取り合えず生活に必要な物を揃えなければならぬ。事前の下調べで駅前商店街がある事は分かっていたので、早速そこへ向かった。

駅前の商店街は、予想と違って人が少なかった。時刻は午後一時。普通なら買い物時な気がするが、客はまばらだ。もっとも、人混みが嫌いな浅見にとっては逆に好都合だった。

取り合えず寝具を購入すべく家具屋を探していると、布団屋と書かれた看板を発見した。

（布団屋なんて、まだ存在したのか……）

漫画でしか見ないような名前の店にまるで一昔前にタイムスリップしたような感覚を覚えながらも、浅見は店の中に足を踏み入れた。

浅見が布団屋から出てきたのは、それから一時間以上経ってからだった。どの布団にするか迷ったわけではない。というより、五分も経たない内に決まっていた。問題なのは、それを店主のお婆さんに伝えた時だ。

見ない顔だ、何処から来たのかと尋ねられ、その後も永遠と質問攻め。初めのうちは早く帰らせてくれと頼んだのだが、途中から無駄だと悟り、満足いくまで質問に答える事にした。もっとも、まさか一時間かかるとは思っていなかったが。

家具を揃える為に更に商店街を回る。一時間かかる事はなかったが、どの店でも必ず名前と年齢と出身を尋ねられた。こんな事なら名刺でも作っておいた方がよかったからかもしれない。

さらに奇妙なのは、道行く人々が皆挨拶してくるところだ。見知らぬ人に次々と挨拶されるの

は、正直気持ち悪い。無視するのも悪いので仕方なく挨拶を返すが、

買い物が終わる頃にはどっと疲れがたまっていた。

元々、人との関わり合いを避けるために田舎に越して来たのだが、これでは全く逆効果だ。

（やっぱり失敗だったかも……）

引っ越し二日目にして早くも後悔の念を抱きながら、浅見は今日最後の目的地に向かっていった。

商店街から少し離れた場所にある、まるでプレハブのような小さな木造の建物。正面の扉には『三岳診療所』と書かれた札がかけられている。

「ここ……だよな？」

建物の前で佇みながら、浅見はぼつりと呟いた。病院というからもう少し大きな建物を想像していたのだが、今の自分の家より少し大きいくらいだ。

（こんなんでちゃんと治療出来るのか……？）

浅見は少し不安に思いながらも、扉を開けて中へと入る。だが、予想に反して建物内はとても清潔だった。床には埃一つ見付からないし、本棚や薬品棚もきちんと整理されている。どうやら心配する必要はなさそうだった。

「…すいませ〜ん」

浅見はしばらく入り口で人が来るのを待っていたが、人の気配を感じないため仕方なく呼び掛ける。暫くすると、奥から足音が近付いてきた。

「お待たせしました。お？　見ない顔だね？」

奥の部屋からやって来たのは、まだ三十代半ばくらいと思われる男性だった。白衣を着ている事から察するに、この人がこの診療所の医者なのだろう。

「昨日ここに引っ越して来ました浅見健吾です。三岳先生ですか？」

「はい。三岳耕太といいます。何かお困りの事がありましたら遠慮なくどうぞ」

三岳先生は屈託のない少年のような笑みを浮かべながらにこやかにそう言った。

「それで、今日はどうしました？」

「実は事務員を一人募集していると聞いてきたのですが……」

「ああ、そうでしたか。では、こちらにどうぞ」

先生はそう言って浅見を中へと案内した。

「まあ、座ってください」

浅見は先生に勧められるまま腰を下ろすと、鞆の中から一枚の紙を取り出した。

「先生、取りあえずこれを」

「なんです？ これは」

先生は差し出された紙を不思議そうに見つめる。

「履歴書……」

「ああ。いりませんよ、そんなの」

「え？」

「そんな紙切れ一枚で何がわかるっていうんですか。採用するかどうかは面接で決めます」

先生はそう言うを受け取った履歴書を机の上にぽいと放り投げた。

「では、自己紹介からどうぞ」

「……………」

結局自己紹介をさせるなら履歴書を見た方が早いのではないか。

浅見は不満に思いつつももうなずいた。

「浅見健吾です。歳は25。学歴は……」

「ああ、いいですよ。名前と年齢だけで」

細かく履歴書の内容を説明しようとした浅見の言葉を遮って、先生が言った。

「25でこんなところに引っ越して来るなんて、何か理由があるんですか？」

「……その質問は採用するかどうかに関係あるんでしょうか？」

「いいえ。ただの好奇心です」

浅見は不満気な声で尋ねたが、先生は大して気にした様子もなくそう答えた。

「話さなければいけませんか？」

「いいえ、話したくなければ話さなくて結構です」

だったら聞くな、と内心思いながらも浅見は続けた。

「その話はまた機会があれば」

「わかりました。では、もう一つ質問です」

「はい」

「あなたはこの町が好きですか？」

「は？」

予想外の質問に、浅見は思わず聞き返した。

「この青葉町が好きですか？」

これまた採用とは全く無関係な質問。だが、先生の表情は真剣そのものだった。

浅見は昨日、今日と町で過ごした時間を思い返す。全ての店は夕方に関り、コンビニすら見当たらない。付近に駅はなく、最寄駅までバスで一時間。その不便さは想像を絶するものがあつた。しかも、町の人間はおしゃべり好きなうえにおせっかい。この町の実際の姿は、自分が想像していたものとはかけ離れていた。

だが、今すぐ帰りたいかと聞かれれば、そうとも思えなかった。

この町に漂う空気は、どこか都会と違う。その違いが何なのかはつきりとはわからないが、何かが違うという事だけははっきりわかる。だからこそ、浅見はこう答えた。

「嫌いじゃ……ないです」

「そうですか」

その答えに、先生は満足そうに笑みを浮かべた。

「では、早速明日からお願いできますか？」

「え？」

「無理ならいつ頃から出来るか教えて頂きたいんですが？」

「待ってください、それはつまり採用って事ですか？」

「はい」

驚きの声を上げる浅見とは対照的に、先生はにこやかに答える。

「学歴も職歴も聞いてないし、志望動機や適正も……」

「病院に勤めた経験があるわけではないんでしょう？」

「それはないですけど……」

「だったら、どんな仕事をしていたとしても同じです。一からのスタートですから。問題なのは、この町で生き、この町で暮らしている人達を好きになれるかどうか。それがわかれば十分です」

「俺にそれが出来ると？」

「はい。私はそう思います」

何の疑いもない笑顔で先生が答える。その笑顔には、なんとなく逆らえないような不思議な力があつた。

「……よろしく、お願いします」

こうして、浅見は三岳診療所の事務員として採用される事となった。

第三話 その少女

4

翌日の朝、浅見は早速診療所を訪れた。特にやりたいこともなければ、やらなければならないこともない。一応仕事として引き受けた以上、最初からないがしろにするのはためらわれた。

「おはようございます」

診療所の中に入ると、先生は既に用具の準備を始めていた。

「おはようございます、随分早いですね」

先生がそうにこやかに挨拶を返す。

「ええ、まあ。初日から遅刻するわけにもいきませんしね」

「朝に患者さんが来ることはめったにありませんから、少しくらい遅れても平気ですよ」

「何か手伝いましょうか？」

「いや、用具の手入れや薬剤の取り扱いが私の役目ですから。あなたにやらせるわけにはいきませんしね」

確かに、何らの免許も持っていない浅見がそれらの事をするには無理がある。出来ることといえば、受付を済ませた患者さんの資料を先生に渡すくらいだろう。もっとも、それすら法律上許されるか不明だが。

「よく考えたら、何の資格もないのに病院の事務って出来るものなんでしょうか？」

「うーん……。一応医師免許が必要な事については私がやりますから、そこまで問題はないと思うのですが……」

「……訴えられたりしませんよね？」

「多分……」

微妙に先行きが不安になってきたが、これ以上話していても仕方がないので、浅見は話題を切り替えた。

「それで、俺は何をしていればいいんでしょう？」

「そうですね……。そうだ、患者さんに朝食を持っていって欲しいんですけど」

「朝食？」

「ええ。一人入院なさっている方がいるので」

「え？ 入院？」

その言葉に、浅見は驚きを隠せなかった。こんな設備もない小さな診療所に入院しても、大した治療が受けられるとは思えない。入院するなら、少し遠くても大きな病院を選んだ方がいいはずだ。

「そうなんです。お一人だけですけれどね。朝食はまもなく配達されてくると思うので、お願いできますか？」

「はい、わかりました」

何故その患者がここに入院しているのかは不明だが、何はともあれ、自分に与えられた最初の仕事だ。朝食を運ぶくらい、どうってことはない。浅見は快くその仕事を引き受けた。

「部屋はこの建物の裏にある離れの中です。私は薬の整理もしなければならぬので、お願いしますね」

先生はそう言うと、手入れを終えた用具を丁寧にしまい、製薬室の中へと消えていった。

それからまもなくして、朝食が診療所に配達されてきた。浅見はそれを受け取ると、早速診療所の裏にまわる。診療所から少し離れた場所に、小さな小屋がぼつりと建っていた。

「あんな場所があったのか……。全然気付かなかったな」

浅見はそう呟きながら、離れの扉を開く。鍵はかかっておらず、すんなり中へと入る事が出来た。

右手と左手に一つずつ部屋の扉が見える。左手の扉には給湯室と書かれていた。

（ってことは、右手が病室だな）

浅見はそう考えると、右手にある扉を軽くノックした。

「……………」

すると、中から小さな声が返って来た。どうやらここで間違いないようだ。

「失礼しまゝす」

そう言って、浅見は病室の扉を開いた。

殺風景な病室のベッドの上に座っていたのは、一人の少女だった。腰の辺りまである長い黒髪に、その髪と同じ黒い瞳。それらとは対照的に、肌はベッドのシーツに溶け込んでしまいそうな程真っ白だ。服の袖から覗く腕は細長く、曲げたらぽっきりと折れてしまうのではないかとさえ思えた。まるで日本人形のような少女を、浅見は暫し呆然と見つめる。

「……誰……？」

すると、いぶかしげな顔をしながら少女の方が先に声をかけてきた。

「え？ あ、ああ。俺は浅見健吾。今日からこの病院で働く事になったんだ。よろしく」

浅見が簡単な自己紹介を兼ねて挨拶する。

「ふゝん……」

だが、少女は興味なさげにそれだけ言うと、視線をそらした。少女の態度は一般的には失礼だったかもしれない。だが、人付き合いを嫌う浅見にとっては町の他の人々よりむしろ好印象だった。

「朝食置いとくからな。ちゃんと食べろよ」

そう言って、朝食を載せたトレイをベッドの隣にあった小さな机に置く。

「食べ終わった頃にまた来るから」

少女にそう告げて、浅見は部屋を去ろうとする。だが、突然立ち止まると、何かを思い出したかのように振り返った。

「そうだ。お前、名前は？」

浅見がそう尋ねると、少女は不機嫌そうな顔になった。

「……ねえ、あなた、ここに勤める事になったのよね？」

「ああ」

「私ここの患者。なんで敬語を使わないわけ？」

少女がきつめの口調で尋ねる。だが、その質問に、今度は浅見が不機嫌そうに顔を歪めた。

「あ？ お前いくつよ？」

「16だけど」

「俺は25だぞ？　なんでお前に敬語使わなきゃならんのだ？」

その言葉に、少女は驚いたように目を見開いた。一方の浅見は、怒っているというよりも不思議そうな顔で少女を見つめている。

暫く見つめ合った後、少女は深くため息をついた。

「変な奴……」

「どっちが？」

「あなたに決まってるでしょ」

少女はそう言うのと机のトレイを自分の方へと引き寄せた。

「もう行っていくよ」

トレイを見つめながらそう言う少女に、浅見もため息をついた。

「変わってるのはお互い様な気がするが……」

そう呟きながら、浅見は部屋の扉を開く。だがその時、背後で小さな金属音が響いた。

浅見が後ろに振り返ると、トレイの上にあったスプーンが床に転がっていた。

「落ちたぞ？」

「わかってる！」

少女は苛立った声でそう言うと、右手で床に落ちたスプーンを掴み取る。だが、また同じ様にスプーンを床に落としてしまった。

「……もしかして、手が不自由なのか？」

浅見の質問にも、少女は何も答えない。

「それならそうと早く言えよ。ほら、スプーン貸しな。食べさせてやっから」

浅見がそう言って床のスプーンに手を伸ばす。だが、その手を少女の手が勢いよく払い除けた。

「いてっ……！ 何すんだよ！」

浅見が少女に抗議の視線を向ける。

少女は浅見をきっと睨みつけた。

「食べさせてくれなんて言っていない」

少女が先程よりもさらに強い口調で言う。流石の浅見もその態度にむっとなった。

「何だよ！ 人が親切にしてやってんのに！」

「あなた、嫌われ者でしょ？」

「え？」

少女が鋭い目つきで浅見を見据える。

その言葉に、浅見は一瞬哑然とした。

「とにかく、大きなお世話！ さっさと出てって！」

「……ああ、そうかよ！」

浅見は怒気を含んだ声で答えると、病室を出て力任せに扉を閉めた。

病室の外に出た浅見は、肩をいからせながら離れの出口に向かった。

「病人だからってつけあがりやがって……ふざけんなっての」

悪態をつきながらずんずんと廊下を歩いて行く。だが、頭の中では先程言われた言葉を思いだしていた。

嫌われ者。そう、確かにそうだった。だが、その原因は浅見健吾という人間を知っているからだと思っていた。彼を取り巻く環境を知っているからだと思っていた。

だが、彼女は自分を知らない。浅見健吾という人間を知らないはずだ。

それなのに何故、彼女は自分が嫌われ者であった事を見抜いたのだろうか。

浅見がそんな事を考えていると、先生がいつの間にか離れにやって来ていた。

「あ、浅見君。言い忘れていた。彼女、少し手が不自由で……」

「知ってますよ。だから手伝ってやるって言ったんですけど、余計

なお世話だって言われました」

浅見が肩をすくめて答える。

「ちよっと甘やかし過ぎでは？　だからあんな風に……」

「……どうやら、私は人選を間違えてしまったみたいだね」

だが、先生は神妙な顔でそう言うと言と浅見を見た。

「次からは食事を運ぶのは私がやるから。君は受付に戻ってくれ」
先生はそれだけ言うと、浅見の横を通り過ぎて病室へと向かう。

「ちよっと待ってくださいよ！」

浅見は強い口調で先生を呼び止めた。

「ん？」

「その言い方だと、まるで俺が悪いみたいなんですけど？」

「いや？　私の人選ミスだからね。私の責任だよ」

「だから、それは間接的に俺が悪いって言ってるんじゃないですか
！」

「まあ、そういう事になるのかな」

浅見の強い口調に動じることなく、先生はしれっとそう言った。

「俺の何が悪いっていうんですか！？」　俺は親切に手伝ってやるっ
て……！」

「浅見君」

浅見の抗議を遮って、先生が静かに、だが力のこもった口調で言
った。

「君はもう25だろう？　何が悪かったかなんて、自分で考えるん
だ。私は君の子守りをするつもりはないよ」

先生はそれだけ言うと、きびすを返して再び病室へと向かう。

「……ああ、そうかい……」

浅見はそう呟くと、ゆっくりと診療所に引き返して行った。

第四話 嫌われ者の心（前書き）

感想・評価くださった方々、ありがとうございます。
今後の参考にさせていただきます。

第四話 嫌われ者の心

5

それから一週間が過ぎた。仕事は初めは戸惑いもあったものの、慣れてくれば大した事はない。心配していた苦情等も今のところはなく、全て順調だった。

あれ以来、離れには一度も足を運んでいない。食事を運ぶのは全て先生の担当になっていた。本来なら事務を担当する浅見の役目だったが、先日的一件以来、先生は忙しくても一度も浅見に運ばせようとはしなかった。

（まあ……俺も行きたくないからいいけどさ……）

浅見がそんな事を考えながら受付の椅子に腰かけていると、待合室にいた二人の主婦の話し声が聞こえてきた。

「ねえ聞いた？例のあの子、まだこの病院にいるんですって」

「本当に？やあねえ……」

「もう今年で三年目でしょう？やっぱり悪い病気なんでしょうね」

「移ったらどうするのかしら？早く出てってくれないかねえ……」

……

あの子、というのは恐らく離れにいる少女の事だろう。彼女がもう二年もこの病院にいるという事も驚きだったが、それ以上に浅見は二人の物言いが気に入らなかった。

「おい」

浅見は席を立つと、先程会話をしていた二人のもとへと歩み寄った。

「そういう言い方はないんじゃないの？」

浅見が威圧的に二人に詰め寄る。

突然食ってかかった浅見に二人は少し驚いたようだったが、すぐに気を取り直したように反論を始めた。

「あなたこの病院に勤めてるんでしょ？　あなたこそ、その態度はないんじゃない？」

「病院の事務員としてではなく、一人の人間として注意してんだよ」「偉そうに……もし移ったらあなたが責任とってくれるわけ？」

「移るような病気なら先生が先に言うだろ。言わねえって事は、そういう病気じゃないって事だ」

「だったら、なんであんな風に隔離してるの？」

「あんたらみたいな奴らの言葉を聞かれないようにするためじゃないか？」

浅見の返す言葉に、二人が言葉を詰まらせる。

浅見はさらに言葉を続けた。

「あいつだって好きで病気になったわけじゃないだろ？　なのに、

そんな言い方……」

そこまで言って、浅見はある事に気が付いた。

「……そっか……」

浅見がぽつりと呟く。突然の事に、二人はわけもわからず呆然と浅見を見つめていた。

「先生！」

昼休み、いつもの通りに運ばれてきた昼食を受け取って離れに向かう途中の先生を浅見が呼び止めた。

「ん？」

「それ、俺に運ばせてもらえませんか？」

その申し出に、先生は意外そうに少し目を見開いた。

「どうしたんだい？」

「お願いします！」

そう言って、浅見が頭を下げる。

先生はその様子をじっと見つめていたが、やがて昼食の乗ったトレイを浅見に差し出した。

「それじゃ、お願いするよ」

「ありがとうございます」

浅見は礼を言ってトレイを受け取ると、急いで離れに向かった。

離れにある病室の前に着いた浅見は、一つ大きく深呼吸をした。

この前の事あるし、向こうも快く受け入れてはくれないだろう。それでも、これだけは言っておかねばならない。浅見は意を決して扉をノックした。

「……どうぞ……」

以前と全く同じ返答が返ってくる。

「失礼しまゝす」

浅見も以前と同じ返答をして、扉を開いた。

浅見の姿を見た少女は驚いたように目を見開いたが、すぐに、きつ、と浅見を睨みつけた。

「何か用？」

少女がきつい口調で尋ねる。

浅見は両手のトレイを小さく掲げた。

「昼食」

「それを置いたらさっさと出てって」

吐き捨てるようにそう言って、そっぽを向いてしまう。その仕草に、

浅見は思わず小さな笑いを漏らした。

少女がさらにきつい視線を浅見に向ける。

浅見は慌てて顔を引き締めた。

「あのさ、今日は俺にやらせてくれねえかな？　食べさせるの」

「嫌」

「頼むよ」

「絶対嫌」

取り付く島もない。浅見は大きくため息をつく。少女の横に歩み寄り、地面に両膝をつく。

「お願いします！」

そして、深々と頭を下げてそう言った。

「ちよっ……ちよっ……」

突然の浅見の行動に、少女が困惑の表情を浮かべる。

だが、浅見は両手を合わせてさらに頼み込んだ。

「お願いします！ この通り！」

浅見の行動に、少女は相変わらず困惑した表情を浮かべていたが、やがて小さく呟いた。

「好きにしたら……」

「本当か！？ サンキュー！」

その言葉を聞いた浅見が子供のように無邪気な笑顔を見せる。

その様子に、少女はますます困惑した。

「……なんで、急に？」

少女が静かに尋ねる。

浅見は昼食の乗ったトレイを自分の方に引き寄せながら答えた。

「お前に、ちゃんと謝らなきゃいけないと思ってさ。この間、ごめんな」

「……………」

「俺さ、人に見下されるのが嫌いなんだ。学校卒業してからバイトしたり会社に勤めたりしたけど、全部ダメだった。上司とか先輩とか、ちよっと早く入ったからって偉そうにしゃがってさ。俺より仕事が出来るわけでもないのに、やたらと指図ばっかする。だから、全部辞めてやった」

浅見はそう言うと、少女の方に顔を向けた。

「お前、この前言ったよな。俺が嫌われ者だって」

「ええ……」

「お前の言う通り、俺は嫌われ者だ。俺の親は資産家でな、俺自身もそうだ。だからだと思ってた。皆に嫌われるのは。でも、そうじゃなかったんだよな。初めてお前に会った時、俺、お前を見下してた。好きで病気になったわけじゃないのに、健常者だからってお前の事を見下して話してた。……多分、今までも同じだったんだ。他

の奴らより俺の方が優れてるって、どこか周りの人達を見下してたのかもしれない。俺が一番嫌いな事を、俺は無意識のうちに他人にしていたんだ。嫌われて当然だよな」

浅見が自嘲気味な笑みを浮かべる。

少女は浅見の言葉を何も言わずに静かに聞いていた。

「今更虫がいいとは思うけど、俺、暫くこの病院にいるつもりだからさ……なるべくならお前とも仲良くしたいなって思ってた……。本当に悪かった！　許してください！」

浅見が再度、ぱん、と両手を合わせる。

少女はしばらくじっと浅見を見つめた後、ぽつりと言った。

「呼び方……」

「え？」

「お前って呼び方やめて。失礼でしょ」

「あ、ああ……。えっと……」

「青井若葉。ちゃんと覚えておきなさいよ」

その言葉に、浅見はぱっと顔を輝かせた。

「ああ！　よろしくな、若葉！」

「……やっぱり、失礼な奴」

若葉はぼそりとそう呟くと、小さくため息を漏らしたのだった。

第五話 疑惑

6

翌日から、彼女に食事を食べさせるのは浅見の仕事になった。先生も浅見の変化を感じ取ったのか、この件について何ら異議を述べなかったのだ。

しかし、食べさせるだけといっても、浅見にとっては初めての経験である。本来なら介護士や先生に色々教わるべきところだったが、この病院にそんな人的余裕はない。

結局、代わりを務めるのは彼女しかなかった。

「じつと見られてると食べにくいんだけど？」

「あ、悪い……」

「私が食べてる間は食べやすいように細かく砕くとか、やる事あるでしょ？　ぼうつとしてでも仕方ないじゃない」

「そ、そうだな……」

これではどっちが世話をしているのかわからない。浅見は心の中で小さくため息をついた。

この前の一件以来、どうも自分の方が見下されている気がする。見下されるのが嫌いな浅見にとっては、自分より年下の若葉にあれこれ命令されるのは相当屈辱的だった。

もっとも、この前全面的に謝罪してしまった身としては強く出るわけにもいかず、こうして耐えるしかないわけであるが。

「ほい、次」

「ありがとう」

きちんとお礼を言ってくれるのが、せめてもの救いである。

若葉が食べている間、言われた通り食べやすいようにおかずを砕いていく。確かにこれなら彼女をじつと見る事はないし、ぼうつと

する事もない。このように、彼女のアドバイスは命令口調ながらも一つ一つ適切だ。だからこそ、浅見は屈辱的なこの状況にも耐えられるのである。

だが、食事係を続けるうちに、新たに一つ別の問題が浮上していた。

「じゃ、次これ」

浅見が野菜炒めを箸で掴んで若葉の口許に運ぶ。すると、彼女が露骨に顔を歪めた。

「……知らない」

「なんで？」

「ピーマン入ってるし……」

「おいこら。好き嫌いすんな」

「嫌」

「はぁ……」

ぷいっと顔を背ける若葉に、浅見がため息をつく。とにかく、彼女は好き嫌が多いのだ。浅見が何度説得しても、がんとして聞こうとはしない。

「あのなぁ、いい年して好き嫌いすんなよ。病気を治すのにバランスの良い食事は基本だぜ？」

「子供じゃあるまいし、そんなんで治ったら苦労しないわよ」

「いやいや、バカに出来んって。最近は食事で健康をつくるのがブームだし……」

「一日中病室にいるんだから、食事くらい好きにさせてくれたっていいじゃない」

「……」

これを言われると、浅見もそれ以上強く言えなくなってしまう。とはいえ、このまま放っておくわけにはいかない。

（何かしら対策を考えないとな……）

そんな事を考えながら、浅見は黙々と食事の手伝いを続けるのだった。

離れから病院へと戻って来た浅見は、受付の席に座りながら早速若葉の好き嫌いに対する対策を考え始めた。

（ようするに、あいつの嫌いなものに含まれるのと同じ栄養を別のものから得ればいいわけだな。とりあえず、今日の献立の栄養バランスを調べてみなければ……）

病院にあった本を参考に、今日の献立に含まれていた栄養を分析していく。だが、調べていくうちに、浅見の表情はだんだんと陰しくなっていくた。

（……おかしいぞ、これは……）

本にあった食品の成分表にシャープペンシルでチェックを入れていく。だが、チェックした部分には明らかに偏りがあった。念のためここ数日の献立も同様に調べていくが、やはり同様だ。

（調理方法で色々変わるといいう話も聞くが、そういうレベルじゃない。そもそも材料に偏りがありすぎる。これじゃまるで……）

そこで浅見は一旦本を閉じると、丁度休憩中だった先生に声をかけた。

「先生、いつもここに運ばれてくる食事って、どこで作られてるんですか？」

「ん？ この町の給食センターだよ。この町の小学校と中学校の給食を作ってるから、ついでにお願いしてるんだ」

「それ、どこにあるんですか？」

「小学校と中学校のすぐ近くだけど……それがどうかしたのかい？」
先生が不思議そうに浅見に尋ねる。

浅見はしばらく何かを考え込むように腕組みをした後、申し訳なさそうに言った。

「先生、ちよつとの間席を外してもいいですか？」

「え？ まあ、構わないけど……急にどうしたの？」

「ちよつと気になる事があって……なるべく早く戻ってきます」

「あ、うん……」

きよとんとする先生を病院に残し、浅見は自分の思い過ぎである事を願いながら給食センターへ向かった。

第六話 それでいい

7

この町には小学校と中学校が一つずつ、隣接して存在している。名前は「青葉小学校」と「青葉中学校」。なんとも安直なネーミングだ。

この町の人口に比例して児童の数は少なく、一学年一クラス。当然校舎を修理する予算も出ず、今にも崩れ落ちそうな、塗装の剥げた鉄筋校舎である。浅見が目指すのは、その二つの校舎のさらに右側に隣接する小さな給食センターだった。

浅見は幼稚園から私立に通っていたため、食事は弁当か学食であり、給食を食べた経験はない。だが、児童に食べさせるような食事なのだから、通常栄養バランスを考えて作られているはずだ。

浅見は給食センターの前にたどり着くと、鉄製の扉をどんどんとノックする。しばらくすると、白い割烹着かっぽうぎを着た中年の男性が顔を覗かせた。

「はい、どなた？」

「初めまして。最近三岳診療所に勤める事になった浅見健吾といいます」

「ああ、あんたが……」

浅見の名前に聞き覚えがあったのか、男は一つ頷いてそう答えた。

「で、何か用でしょうか？」

「うちの診療所に入院している青井若葉の食事をここで作っていると聞いたんですが」

「ああ、そうだよ。三岳先生は診察で忙しいから、うちで代わりに作ってるんだ」

「随分いい加減な仕事みたいですね」

「何？」

その浅見の言葉に、男は不機嫌そうに眉をひそめた。

「いきなり何だあんた。うちはわざわざ……」

「これを見てください」

男の言葉を遮って、浅見は一枚の紙を男の目の前に付きつけた。

「食品の成分表です。ここ三日の献立に含まれた食品を調べてチェックしました。異様に偏っています。当然ですね。メニューは違えど、使っている食材は毎日ほとんど変わってませんから。しかも、若葉が嫌いなものを中心に選ばれています。食器と残飯はいつもそちらに返却していますから、若葉がいつも残しているのは知っているはず。にも関わらず、何故同じ食材を使うんですか？」

反論する間もなく一氣にまくしたてられ、男がさらに不機嫌そうに顔を歪める。

「答えてください。思うに、あなた方は故意に……」

「知るか」

浅見がさらに追求しようと口を開いた瞬間、男は一言そう言うのを閉めてしまった。

「あ！　おい、まだ話は終わってねえぞ！」

浅見が両手でがんと扉を叩く。だが、中からは何の返事も返って来なかった。

「おい！　開けろ！　ふざけんな！」

大声でそう叫びながら、何度も扉を叩く。だが、やはり返事が返って来る事はなかった。

「……なんでだよ？」

何故こんな事をするのか、浅見には理解出来なかった。浅見は料理に疎いので実感はないが、料理を作る側としては、普通おいしく食べてもらいたいと思うのではないだろうか。それなのに、わざわざ嫌いなものばかりを出すなんて。

浅見がいくら叫んでも、返事が返ってくる事はない。自分の無力さを痛感しながら、彼は重い足取りで病院へと引き返した。

その夜、浅見は夕食の乗ったトレイを手を離れにやって来た。トレイの上にあるメニューは、以前と変わらない。もしかしたら改善されているかもしれないと期待したのだが、その期待はむなしくも打ち砕かれた。

(……くそっ……!)

昔から、出来ない事などほとんどなかった。

おかしいと思う事には反対し、全て変えてきた。自分には、それが出来るだけの力がある。そう信じていた。

だが今回、浅見は何も出来なかった。何も変えられなかった。

そして、知った。自分が今までしてきた事は、自分の力ではなく、浅見健吾という名前によってなされていたという事を。

ここでは、誰も自分を知らない。この名前がないと、自分はこんなにも無力だ。

トレイに載せられた献立を見ながら、浅見はぐっと唇を噛み締めた。

「若葉、入るぞ？」

病室の扉を軽くノックしながら尋ねる。

「どうぞ」

いつも通りの返事が返って来たのを確認して、浅見は扉を開いて中へと入った。若葉の隣に腰掛け、食事の手伝いをする。だが、いつものように嫌いなものを食べさせようという気にはならなかった。

「今日は無理強いないのね？」

すると、珍しく若葉の方から声をかけてきた。

「え？　ああ、どうせ食べないんだろ？」

「気付いたんだ？」

若葉が悪戯っぽく笑う。

浅見はその言葉に驚きを隠せなかった。

「お前こそ、気付いてたのかよ!？」

「当たり前じゃない。毎日食べてれば普通気付くわよ」

「なんで言わなかったんだよ！　言ってくれたら……！」

「何か変わった？」

「……………」

その質問に、浅見は口をつぐんだ。何も変わらなかった。それが、現実だ。

「前に言ったよね？　あなたは嫌われ者だって。どうして私がすぐに分かったと思う？」

「だから……それは俺の態度が……」

「それだけじゃないよ」

若葉は浅見の言葉を遮って言った。

「同じだから」

「え？」

「私も嫌われ者だから」

「……………」

若葉と和解した日、待合室での主婦達の会話が思い出される。

「でも……それでいい」

若葉がぽつりと呟く。

「それでいいの……」

そして、自分に言い聞かせるようにもう一度同じ言葉を呟いた。

食事の手伝いを終えて病室を出た浅見は、部屋の前で一つため息をついた。

「それでいい……か」

そう言った彼女の寂しそうな横顔が、浅見の頭から離れない。

何故彼女はそんな事を言ったのか。その理由はわからない。だが、一つだけ分かった事があった。

彼女のために、何かをしてあげたい。どんな小さな事でも、どんな些細な事でもいい。何かしら、力になってあげたい。

誰にも、自分と同じ過ちを繰り返して欲しくないから。

自分には、いますぐ現状を変える力はない。これが事実であり、受

け入れなければならぬ現実だ。

なら、自分に出来る事は何なのか。今の自分に出来る事は……。

「……よし……」

浅見は一つ頷くと、早足に離れを後にした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8179b/>

俺達のスピードで

2010年10月17日09時07分発行